

女騎士が触手に犯られる小説

一章 覚醒

ぴちゃん…。

頬に冷たいものを感じて私は覚醒めた。

「くっ…ここは」

ゆっくりと目を開いても、そこには同じ暗闇が広がっているだけだった。重く湿った空気が、肌にまとわりつき、鉄臭い匂いが鼻腔を突く。体を起こそうとすると、全身を鈍い痛みが走った。

「そうか…私は…」

この漆黒と静寂の世界で、私は、ようやくこれまでの事を思い出した。

二章 不安

「全軍、指示が有るまで待機！」

私は自軍に号令すると、乗っていた馬を翻して眼前に迫る巨大な洞穴を見つめた。まるで、侵入者を飲み込んでしまおうと口を開けて待ち構えている魔物のようだ。

そう考えて、我ながらうまい事考えたと苦笑いを浮かべた。そう、あの洞穴にいる魔物討伐が今回の任務なのだから。

「アシエル將軍、何かおかしいのですか。不謹慎です」

傍らにいた男が、私の方に馬を寄せて耳打ちした。参謀のセルヴオだ。幾分頼りない感は否めないが、信頼出来る数少ない私の部下だ。

「大体、今回のお役目、將軍自らお出になる事は無かったのです」

「また、其の話か。いい加減しつこいぞ。貴族諸侯らは、一介の貧乏貴族